2005年7月　第6回上方講談南鱗一門勉強会「うろこの会」での高座風景

上方講談師

旭堂南鱗さん

プロフィール

1950年、大阪市生まれ。25歳で旭堂南陵に入門。南幸の名を貰うがすぐ南光に改名。88年、南鱗を襲名し真打に昇進する。主な活動に年1回の「南鱗独演会・講談の夕べ」、月例の「上方講談を聞く会」、「天満講談席」など。他に円光寺寄席（貝塚）、つつみ寄席（八尾）など地域寄席も。また、笑福亭学光師と共催で94年にスタートした「オーク弁天寄席」は今月、131回目を迎える。受賞歴は東京国立劇場「第19回花形若手演芸会」新人賞銀賞（84年）、大阪舞台芸術奨励賞（02年）など。

130回超えた「オーク弁天寄席」初回からのレギュラー

大阪市港区の市立弁天町市民学習センターが開催している芸術文化サロン事業のひとつに、「オーク弁天寄席」がある。1994年（平成6年）11月、"関西を中心に活躍する若手・中堅の芸人による地域寄席"をキャッチフレーズにスタート。毎月第4水曜日午後7時からの高座には、落語と講談をメインに、月替わりで漫才やマジック、音楽ショーなどが加わり、定員の120席が毎回ほぼ埋まるほどの人気寄席に育っている。

先月8月、めでたく130回目を迎えたこの「オーク弁天寄席」に、落語家・笑福亭学光さんと共に第1回目からレギュラーとして、また世話役として出演し続けているのが、上方講談師の旭堂南鱗さんである。

「毎月ですからネタ選びも大変なのですが、喜んで帰りはるお客さんの顔を見たら、苦労も吹き飛んでしまいます」と南鱗さん。演じるのは、「谷風情け相撲」「幸助餅」などの相撲ネタや、「秀吉と易者」「山内一豊とその妻」など軍記物のほか、「善悪二筋道」のような日常生活にちなむ世話物だ。「講談で読んで（演じて）いるのは、無くなりかけている勧善懲悪、長幼の序の精神なんです。ええことせなあかんで、お年寄りを大切にしなさいよということですね」。この分かりやすい"筋立て"が、拍子木で釈台を打ちながら調子をとる音響効果と、七五調の語呂のいい言葉が相まって、多くのファンをひきつけるのである。

◇落語ファンから"変身"◇

いまや上方講談界を牽引する南鱗さんだが、もともとは落語ファンだった。寄席が好きな父親に連れられ、小学生のころから角座通い。「小学3年生で笑福亭松鶴師匠の落語を聞いてファンになり、以後はほぼ追っかけ状態（笑）」。高校時代には、「当世の若者が並ぶジャズ喫茶の『ナンバ一番』を横目に、僕は角座前で並んだ（笑）」ほどだ。

そんな南鱗さんが講談に興味を持ったのは、母親から「お前の曾（ひい）爺さんは講釈師やったそうな」と聞かされてからだ。市内の落語会で、その後弟子入りする旭堂南陵師（8月に死去）の講談に耳を傾けるようになり、いつしか「落語もええけど、講談もそれ以上や!」と講談ファンに。ほどなく、一般を対象に講談を指導している「講談道場」に入塾することになる。南陵師に入門を許されたのは、その1年数ヵ月後だった。

「会話」が中心の落語に比べ、講談は「読む」演芸といわれ、固有名詞を出しての描写が特徴だ。「夢中でしたから」と多くは語らないが、ネタを覚えるのはもちろん、関連の書物を読み、登場する現場に取材に行くなど、厳しい修行時代をくぐり抜けてきたのは言うまでもない。現在は、「うろこの会」と題した南鱗一門の勉強会や、「講談道場」などで芸の伝承と後進の指導に当たっている。

「入門当時は師匠を入れてもたったの4人だった」という関西の講談師も、いま15人が活動中だ。「ええ、確かに演者もファンも確実に増えています」と南鱗さん。「さらに勢いをつけるためにも、スターが出てほしいですね」と目を細めていた。

（文・脇本勤／写真・高島悠介）